

# ラオスの在来技術を活かした新たな農業集約化の可能性

平成 22 年度入学

参加したフィールドスクール：ナミビアフィールドスクール

調査国：ラオス人民民主共和国

佐野航平

キーワード：ラオス、農業、家畜、山間地、自然資源、生業

## 自分の研究テーマについて

山間地には低地、斜面地、丘陵、河川、森林など多様な自然、地形環境がある。その多様な環境にラオス北部の住民は水田稲作と焼畑、そして家畜・家禽飼育、漁労、非木材林産物採取など様々な生業を組み合わせ対応してきた。しかし、現在では政府が焼畑を停止させ、焼畑の代替として商品作物栽培を普及させようとしている。それに伴い在来の生業との間に問題が起きている。例えば農薬の使用と家畜・家禽飼育の両立が困難であり、また山地を商品作物栽培のために開墾し、非木材林産物の枯渇が心配されている。収穫物は周辺の国に輸出され、商品作物栽培は外部市場に依存している。商品作物の輸出が何らかの原因で停止される、国際市場価格が下落するなどの可能性もあり商品作物栽培に依存した農業だけではラオス北部山間地の農民が安定的、持続的な収入を得られるか疑わしい。

よって本研究テーマの農業集約化において焦点をあてるのは、農業と他の生業の複合による利益の安定化とその利益の持続である。山地民の在来の生業と、商品作物栽培などの近代農業双方を組み合わせることによって利益の安定化とその持続が達成できる可能性を示したい。

## フィールドスクールから得られた知見について

ある国や地域の問題点を改善するためには、その問題点の背景や原因を探らなければならないと再認識させられた。自然環境以外にも人口分布、歴史的背景、宗教さらには家族構成までも日本やラオスとナミビアは全く異なり、野生動物の保護や貧困層への教育、エイズの感染予防などの様々な問題点を改善するにあたって単純な比較は出来ないと解った。これは自身が関わりたい農業分野でも同じで、決して農業技術だけを導入しても問題点の改善にはならないことを意味する。これはフィールドスクール期間中に現地住民、小学校の教師、UNICEF スタッフ、研究者など様々な人と会い、インタビュー出来たことによる結果であり、有意義であったと考える。

しかし逆に様々であるからこそ、全く知識のない分野のことも考えることとなり、理解しきれなかった点もある。また単純な解決策がない問題も多く、当事者ではない人同士で議論をしたかった。フィールドスクール参加者の他の学生と議論する時間がもう少しあれば、さらに別の見方が発見できたかもしれない。10 日間という限られた時間のため難しいかもしれないが、議論の時間をもう少し用意すればより良い結果が得られたと考える。

## フィールドスクールで学んだことがどのように研究テーマにいかせるか？

主に訪問したトップナラの人達はヤギ（写真 1）の放牧と野生植物のナラの採集を主な生業にしている。これら二つは現在商品として売られている。ヤギの場合家畜市場に販売され、ナラの場合ナラの種

子（写真2）が食用、加工用に販売されている。他の生業として小規模なホームガーデン（写真3）を行っていた。これにはヤギの糞が使われており、乾燥地のため肥沃でない土壤に有機物を効果的に供給していると考えられた。小規模なガーデンではあるが、余剰生産物は販売していた。このように在来技術による産物が商品となっており、直接比較することは出来ないが自身の研究の参考になった。

またもう少し広い視点で見ると、地元住民の生活と鉱業、そして野生動植物の保護との間で地下水の利用や土地の利用方法などの点で問題が起きていると解った。よって自身の研究も持続性を農家や集落の単位以外に、今回のフィールドスクールで学んだより広い視点から調査する必要があると考えさせられた。



写真1  
ヤギは川原に生える草木や、アカシアの実を食べる。



写真2  
乾燥中のナラ種子。ウォルビスベイというナミビア第二の都市へ売られる。



写真3  
ヤギ除けの柵に囲まれたホームガーデン。水は地下水を利用している。